

「自分の考え」を大切にしたい 「話すこと・聞くこと」の授業

新しい指導を考える会

1 「話すこと・聞くこと」と「考える力」

(1) 「考える場」と「認知の場」

授業の中で「考える力」を磨くには、大きく分けて二つの場の設定が必要である。一つは課題や生じた問題の解決に向けて考える場。もう一つは、解決に向けてどのように考えるか見通しを立てる、あるいは自分の思考の流れを俯瞰的に把握する場である。この二つを限られた時間の中で有機的に結びつけることが、考える力を伸ばす鍵であり、自己学習力を育てることにつながると思えている。

(2) 基礎・基本としての「考えること」

『中学校学習指導要領(平成十年十二月)解説―国語編―』では、「話すこと・聞くこと」の目標の基底に、「ものの見方や考え方の深さがある」としている。そのうえで、「自分の考えを大切にし」(第一学年)とは、物事に対する自分としてのと

らえ方や考え方を大切にすることである。話す意図や意味が明確であるためには、自分の考えている内容が自分自身によく把握されていることが必要である」と解説している。つまり、「その場面で話す内容としてふさわしい自分の考えをもつこと」、「自分がどのように考えてその内容・方法で話そうとしているのかを認識すること」が、「話すこと・聞くこと」の基礎・基本にあるといえる。

(3) スキル習得への偏重

自身の実践を振り返ると、「話すこと・聞くこと」の授業が技術の習得に偏りがちであることに気づく。「目的や場面に応じて的確に話したり聞いたりする能力」の育成を目指すものの、例えば、学習者の意識が「大事なところを強調して話す」、「大事なところを聞き逃さずメモする」といった一般論のレベルから先に進まず、それに対する指導者の支援や評価も抽象的な状態から抜け出せなかった。それは、指導者側が「自分の考えを大切にし」、「自分のものの見方や考え方を深め」という目標の文言を、具体的にとらえ直さないまま授業を組み立てていたからであろう。以上のような考えと反省のもと、自分の考えを大切にすること、自分の思考の流れを認識することに主眼を置いた「話すこと・聞くこと」の授業を行った。

2 実践 『わたしたちの「名前」』(二年 六月)

(1) 単元構想とねらい

単元を構想するにあたり、「考える力」にかかわって次の点に留意した。

○自分の考えをもたせるために

- ・生徒の実生活に直接反映するような、学習意欲を喚起・維持できる教材を選定する。
- ・学習課題は、共通する課題でありながら個別の考えを求めているものにする。

・課題の価値を理解する場を設け、段階を踏んで丁寧に考えさせることで、自分の考えに自信と愛着をもたせる。

○思考の流れを認識させるために

- ・考えがまとまるまでの思考の流れがわかるような学習プリントを工夫する。
- ・把握した思考を授業の中で活用する場を設定する。
- ・思考と技能習得が乖離しないために

・話す・聞く技能は、内容・目的とのつながりという視点で必然性があるものに絞って取り入れる。

・技能の定着をねらった反復は、意図や意味を理解したうえで、単元の後半に取り入れる。

本校では、年度末の学年文集の発行が、四十年来の伝統になっている。そして数年前から、学年文集名は日常的な学年の呼称となり、卒業後も同窓会などで活用するようになった。上級学年が自学年を「銀河学年」、「雄飛学年」などと愛着をもって呼ぶこともあり、第一学年の生徒たちにとって学年名をもつことは、仲間入りを実感することにつながっている。「学年名」の選考は生徒の意欲を喚起し、個別の考えをもたせることもできる、魅力的な学習材であると考えた。

単元の学習目標としては、次の二つを生徒に提示した。

〈学習目標〉

○「提案すること」「聞くこと」を通して、考える力と考えを伝

えるために必要な力を高めよう。

○「名づけること」を通して、言葉の意味や込められた思いについて考える姿勢を身につけよう。

(2) 学習過程(七時間+一時間)

- ①これまでの「学年名」を研究する(三時間)
 - ・意味調べ、込められた願いの推理
 - ・発表(各自↓学級)
- ②自分の思いや願いを込めた学年名を考える(一時間)
 - ・提案する学年名を考える
 - ・プレゼンテーションの原稿作り
- ③プレゼンテーションⅠ(一時間)
 - ・発表(各自↓グループ)
 - ・推薦作品の決定(グループ)
- ④プレゼンテーションⅡ(一時間)
 - ・発表(グループ代表者↓学級)
 - ・投票(相互評価・自己評価)
- ⑤学習のまとめ(一時間)
 - ※プレゼンテーションⅢ(学年集会 一時間)
 - ・発表(学級代表↓学年)
 - ・投票(相互評価・自己評価)

単元の中核となる学習活動は、各自が学年名を考え、提案する活動である。それに向けて、前半は「学年名」がどのようなものなのかを理解する場と位置づけた。また、各自が学年名を提案する過程で、自分の願いと選ぶ言葉の関係や名称として掲げられる言



実践提案 ①

実践提案 ②

実践提案 ③

葉の特性などを把握し、思考の流れを認識することができたならば、後半の選考の際の判断基準になるのではないかと考えた。「話すこと・聞くこと」の技術的な力としては、「聴衆の反応を確かめながら話すこと」、「必要に応じてメモしながら聞くこと」に絞り、発表を聞く活動を出発点として、プレゼンテーションⅠ・Ⅱ・Ⅲで改善・応用させていこうと考えた。

3 考察 ― 成果と課題

(1) 「自分の考えを大切にする」とは

本単元における「自分の考えを大切にする」とは、自分がその言葉を学年名として提案する根拠や、その中でも特に大事だと思ふこと、また、実は不十分だと思っていることなどを把握しているということだろう。それらが認識できていれば、他者からの評価を適切に受け止められるし、仲間の考えとの共通点や相違点を見つけ、意見をまとめていくことも可能になる。

資料 a は、プレゼンテーションⅠの原稿作りに用いた学習プリントである。多くの生徒は流れに沿って、自分の「思い」や「願い」から考え始めたが、直感的に学年名を思いつく生徒もいた。しかし、それだけでは提案ができないため、思いついた言葉や漢字の意味を調べたり、自分の理想とする学年像とつき合わせたりするなど、「直感」を分析する姿が見られた。また、自分の「思い」や「願い」と言葉の意味がかみ合わないため、考え直す生徒もいた。自分の考えを把握しなければ人に説明することはできないし、聞き手の反応を確かめながら話す余裕はもてない。今回はねらいとしなかったが、話し方の工夫も、話す内容が練られていなければ、形だけのものになってしまう。

(2) 「自分の思考の流れ」を書き留める

資料 a の学習プリントは、指導者が実際にプレゼンの原稿を書くまでにたどった思考の流れに沿って作った。このような思考方法が、標語募集や生徒会活動でのスローガンを考える場面など、実生活の中で活用できる「思考の流れの基本」と考え、生徒に身につけさせたいと思ったからである。

しかし、生徒の思考の流れや発想法はそれぞれである。先に挙げたように、直感的なアイデアからスタートして分析する生徒もいれば、学習プリントの枠が窮屈だと感じつつ、アイデアを書き留めた生徒もいる。(資料 a 前半・b) 大切なのは、学習プリントの流れに沿って思考させるのではなく、「自分の思考の流れ」を把握することの意義を実感させることであった。指導者が示す「思考の流れ」は、アレンジ可能な一つの手がかりでしかない。例えば、共通の項目を示して考える順番は各自に任せたり、スタートとゴールだけを共通にしたりするなど、個々の生徒の考え方の良さが生かされる学習プリントや指示の出し方を工夫していくことが、今後の課題である。

(3) 思考のための技能、技能のための思考

資料 c・d は、過去の学年名についての発表を聞きながら生徒がとったメモである。ここでは、単元の流れを知らせたうえで、発表を聞いて「なるほど」と思ったことをメモするよう指示した。つまり、学年名を考える手がかりとなりそうなことを書き留めるということである。資料 c の生徒は仲間の発表を聞き、学年名の性質について気がついたことを書き留めている。資料 d の生徒は、学年名に込められた願いを中心に聞き取り、書き留めている。次時の課題は共通していても、考えるにあたって参考になることは生徒によって違っている。

また、グループや学級で推薦作品を絞っていく際の推薦理由に、「○○さんが提案した学年名には、自分が考えた意味も含まれていて、自分のよりも言葉の響きがきれいだから」といった、自分の考え方や作品と重ねたり比べたりしたものも多く見られた。「自分の考えを大切にすること」は、適切なポイントをもつて聞くことにもつながっていく。

思いにふさわしい学年名を提案しよう

【資料 a】

思いにふさわしい学年名を提案しよう

【資料 b】

「学年名に込められた願いを聞き取ってメモする」のように、メモの内容を指示することも考えられる。しかしそれは、指定された情報を注意深く聞き取る鍛錬を目的とした指示であり、自分の思考に活かすという目的にはそぐわない。いっぽう、「聴衆の反応を確かめながら話すこと」については、必要性和具体的な方法を考えさせた。その結果、「提案が聞き取れないと困るから」、「声の大きさと話す速さに気をつける」、「話し始めに、一番後ろの人の様子を見る」が共通の留意点となった。

「自分の考えを大切にすること」ためには、各自の必要性に応じて方法を選択する力を育てていく必要がある。そして、考えを伝え合うためのスキルは、意義の理解と実用できる具体性があること、「生きる力」となっていくのではないだろうか。

【資料 d】

【資料 c】